

地域自然史と保全研究大会 2018
関西自然保護機構（KONC）2018 年大会
プログラム・講演要旨集

日時：2018 年 3 月 4 日（日） 10：00～17：00
会場：大阪市立自然史博物館 本館 講堂・ナウマンホール
参加費：無料（ただし博物館入館料が必要）
主催：関西自然保護機構・大阪市立自然史博物館

プログラム

ポスター掲示（10：00～17：00）

10：00～10：30 関西自然保護機構 2018 年度総会

10：30～11：45 口頭発表（2017 年度研究助成事業研究報告会）
（昼休み）

12：45～13：45 ポスター発表 コアタイム

13：45～14：30 2017 年度四手井賞授賞式典・授賞記念講演
（休憩）

14：45～17：00 シンポジウム
「都市の生物多様性地域戦略－外来生物・保全・教育」

2017 年度四手井賞 授賞記念講演（13：45～14：30）

Z01 「大阪府における外来哺乳類，アライグマ，ヌートリア，ハクビシンの分布拡大状況 農業被害アンケートによるモニタリング」

幸田良介（大阪府立環境農林水産総合研究所）

農家へのアンケート調査から外来哺乳類 3 種の分布拡大状況を調査した。大阪府ではアライグマが最も広範に分布し農業被害も顕著であり，さらなる分布拡大がみられることから被害増加が懸念された。ヌートリアの分布は北部地域が中心で，捕獲の効果がみられる地域がある一方で，淀川流域では個体数や被害の増加が示唆された。ハクビシンの分布はまだ限定的であるものの，分布や農業被害が拡大傾向にあることが明らかになった。

口頭発表（2017 年度研究助成事業研究報告会）（10：30～11：45）

O01 「琵琶湖産スジエビにおける集団間の生態的・遺伝的分化の解明」

○鰐 倩倩・源 利文（神戸大・院・人間発達）

O02 「関西のニホンジカ個体群における外来シカ由来の遺伝子流入状況の把握」

○幸田良介（大阪環農水研），松本悠貴（総研大・遺伝研）

O03 「京都府内に分布するニホンヒキガエル 2 亜種の分布・生殖隔離の実態調査」

京都爬虫両生類の会，○福山伊吹（京都大学農学部森林科学科），西川完途（京都大学人間・環境学
研究科）

O04 「隠れた絶滅危惧水生植物コガマの減少実態とその要因」

○倉園知広・角野康郎（神戸大学大学院理学研究科生物学専攻）

シンポジウム（14：45～17：00）

「都市の生物多様性地域戦略－外来生物・保全・教育」

近年、神戸市生物多様性プラン（2016年3月）、東京都港区生物多様性地域戦略（2017年12月）の改訂、大阪市生物多様性戦略（2017年11月中間案公表）など、都市部でも生物多様性戦略が作られ、都道府県でも京都府生物多様性地域戦略（2017年12月パブリックコメント）が策定されるなど、関西圏でもほぼ地域戦略がでそろってきています。しかし、こうした行政の動きをどのように受け止め、現実の保全をどう進めていけばいいのでしょうか。戦略がでただけでなく、戦略を次に繋げるための方策を検討してみたいと思います。

S01 「趣旨説明」

佐久間大輔（大阪市立自然史博物館）

S02 「都市にとっての生物多様性戦略の可能性」

中村俊彦（千葉県生物多様性センター）

S03 「大阪市戦略の策定で残された課題」

平井規央（大阪府立大学）

S04 パネルディスカッション

進行：佐久間大輔

パネラー：和田 岳（大阪市立自然史博物館）ほか

口頭発表 講演要旨（10：30～11：45）

O01 「琵琶湖産スジエビにおける集団間の生態的・遺伝的分化の解明」

○鰐 倩倩・源 利文（神戸大・院・人間発達）

琵琶湖産スジエビ（*Palaemon paucidens*）は主に冬期には深場に移動することが知られており、一方で、浅水域において冬季非移動個体の存在が確認された。遺伝的構造を解析した結果、琵琶湖産スジエビは、ランダム交配する大きな集団内の生活史多型であることが示唆された。異なる移動生態型に関連した生態的な違いについては、非移動個体の成長率が高いことが示された。

O02 「関西のニホンジカ個体群における外来シカ由来の遺伝子流入状況の把握」

○幸田良介（大阪環農水研）、松本悠貴（総研大・遺伝研）

大阪府岬町で、在来シカと和歌山県友ヶ島の外来シカの交雑個体が1頭捕獲された。外来シカによる在来シカへの遺伝子攪乱状況を調べるため、近隣地域でのシカの定着状況調査と遺伝子分析を行った。近隣地域ではシカの生息痕跡が全く見られず、現時点で他に外来シカの遺伝子配列が検出された個体がないことから、在来シカ個体群に対する遺伝子攪乱はまだ限定的であると考えられた。今後はより広域での分析を進める必要がある。

O03 「京都府内に分布するニホンヒキガエル 2 亜種の分布・生殖隔離の実態調査」

京都爬虫両生類の会, ○福山伊吹 (京都大学農学部森林科学科)

ニホンヒキガエルとアズマヒキガエルの分布境界である京都府と周辺地域における両亜種の分布状況を調査した。本研究では、当該地域から得た 74 個体の種ニホンヒキガエルについて、形態形質の測定および、mtDNA に基づく系統解析による同定を行った。その結果、多くの調査地で両亜種が同所的に採集され、分子系統解析が形態分類を支持しない個体も得られた。これは両者の同所的な分布に加え、交雑の可能性を示すものである。

O04 「隠れた絶滅危惧水生植物コガマの減少実態とその要因」

○倉園知広・角野康郎 (神戸大学大学院理学研究科生物学専攻)

コガマ *Typha orientalis* Presl は、環境省版レッドリストには記載が無いものの、近畿地方では絶滅危惧種として認識されている。近畿地方 34 地点でコガマの生育状況を調査した結果、25 地点で生育が確認されたが、9 地点では個体群が消失していた。コガマが消失した地点では湿地環境が失われていたが、現存していた場所には湿地環境が残されていたことから、生育適地をどのように残すかが保全の課題となる。

ポスター発表 講演要旨 (コアタイム 12:45 ~ 13:45)

P01 「兵庫県兵主神社寺林 (丹波市) の衰退と土壤酸性化の関係」

○西川翔太・伊藤和男 (大阪府立大学高専 環境物質化学コース)

本研究では兵庫県丹波市の貴重な歴史的森林である兵主神社スギ林について、スギの衰退指数の調査と土壤の化学分析を行った。スギ 24 本 (全体で約 100 本) の調査の結果、衰退が明らかな指数 3 以上の樹木が 79% と、スギ林の衰退が確認された。また、平均土壌 pH は 4.55 であり、土壌は酸性化していた。衰退指数は土壌 pH、水溶性陽イオン (モル比)、交換性陽イオンと相関が見られた。

P02 「大阪府立大学中百舌鳥キャンパスにおける変形菌の生態分布」

○藤田博昭・中山祐一郎 (大阪府立大・現代システム科学), 松村 篤・中村彰宏 (大阪府立大・生命環境科学)

土壤中に豊富に存在する微生物である変形菌の生態系における役割を知るために、大阪府立大学中百舌鳥キャンパス内の 29 の調査区において変形菌の分布様式と環境要因を調査した。子実体の野外採取とリターの湿室培養から 4 科 10 属 25 種の変形菌が確認された。調査区あたりの出現種数は 7 種~0 種 (平均 1.8 種) と大きく異なり、調査区の土壌 pH と全窒素量、および樹木の種組成と関連のあることが示された。

P03 「在来種タンポポの逆襲 繁殖干渉と外部形態のクライン」

○谷垣顕佑・西田隆義 (滋賀県立大学環境科学部)

滋賀県の在来タンポポは、頭花の外部形態の地理的変異に基づき分布移行帯のタンポポと考えられてきたが、湖東地域の個体群を独立種として扱う解釈もある。また、外来タンポポによる繁殖干渉の影響も大津周辺を除いて不明だった。本研究では、1) 頭花の外部形態は濃尾平野から湖南地域までは地理的クラインを示すが、湖南より南にはクラインがないこと、および 2) 全ての地域で外来タンポポから繁殖干渉を受けないことが示された。

P04 「奈良県のナヨクサフジの分布拡大要因とその影響」

山本浩大（奈良教育大学）、長谷川匡弘（大阪市立自然史博物館）、夏目 花・横山 碧・三宅隆裕・森下秀一郎（奈良教育大学附属中学校）

奈良県のナヨクサフジの分布調査、訪花昆虫の特定、ナヨクサフジの有無による植物への影響について調べた。奈良県の多くの河川で分布が確認され、2016～17年にかけて分布が拡大した。訪花昆虫は主に3種であった。袋がけ実験から、自家受粉しないことが分かり、訪花昆虫が存在することが必須であることが分かった。植生調査では、ナヨクサフジの被度や群度が大きいコドラートでは草本植物の種数が減少する傾向が見られた。

P05 「高槻市における3種の外来水草の駆除実績と現状」

高田みちよ（高槻市立自然博物館（あくあびあ芥川））

高槻市内に生育する特定外来生物の水草3種について。ミズヒマワリは芥川で2002年ごろから確認され、上流側では駆除に成功し、現在では国交省に協力してパトロールを実施している。オオバナミズキンバイ、ナガエツルノゲイトウは2006年に農業用水路で発見され、駆除を行っている。オオバナミズキンバイは完全駆除の目途が立ったが、ナガエツルノゲイトウは私有地に生育していることから、行政の手が及ばず、駆除が難攻している。

P06 「岸和田市の久米田池における水生植物相の現状と変遷」

○横川昌史（大阪自然史博）、首藤光太郎（新潟大）、風間美穂（きしわだ自然資料館）、志賀 隆（新潟大）

久米田池で水生植物相を調べたら12種が見つかった。優占種はホザキノフサモで、大阪府新産のリュウノヒゲモや環境省絶滅危惧Ⅱ類のツツイトモも生育していた。過去の標本や文献、写真を調査したところ久米田池の水生植物相は劇的に変化してきたことがわかった。これらの詳細に加えて、2018年の秋に実施する水生植物調査の研修会の宣伝を行う。

P07 「兵庫県神鍋高原の黒ボク土の微化石からみた草地景観の変遷」

○林 尚輝（大阪市立大学大学院理学研究科生物地球系専攻）、河野樹一郎（西日本技術開発株式会社）、井上 淳（大阪市立大学大学院理学研究科生物地球系専攻）

本研究では現在も火入れが行われススキ草地在維持されている兵庫県神鍋地域において、その植生と火入れを知るため、神鍋地域に分布する黒ボク土中の植物珪酸体と微粒炭の分析を行った。その結果、神鍋山では約1万年～8千年前はササ属を中心とする植生であったが、約8千年～2千年前に火による攪乱が増し、メダケ属を主とする草地となった。そして約2千年前に降、火入れが行われススキ草原となったことが明らかとなった。

P08 「古琵琶湖層群蒲生層から産出した珪藻化石の分類学的検討」

○富小由紀（琵琶湖博物館たんさいぼうの会／滋賀県立大学環境科学部）、大塚泰介（琵琶湖博物館たんさいぼうの会）、堂満華子（滋賀県立大学環境科学部）

古琵琶湖層群蒲生層の珪藻化石を分類学的に検討した。約180～190万年前に堆積したと推定される地層の11層準から珪藻化石の試料を採取した。光学顕微鏡および電子顕微鏡による詳細な分類学的検討の結果、48属156種（変種・品種含む）を分類し、うち121種を同定した。本研究では絶滅種として知られている種は認められなかったが、未同定種に絶滅種が含まれる可能性があるほか、同定できた種の中にも日本で報告がない種が含まれていた。

P09 「ダム建設予定地下流の河川における糸状藻類と流速の関係」

○相子伸之・山本義彦・近藤美麻・小田優花・山口翔吾・内藤 馨（(地独)大阪府立環境農林水産総合研究所）

ダム建設は治水に有効な手段であるが、下流の流況の平滑化し河床攪乱が減少するため、糸状藻類の異常繁茂が懸念されている。一方で、フラッシュ放流は一時的な人工洪水をおこすことで、ダム下流に河床攪乱効果をもたらすことが期待される。本研究では治水ダムを建設してる安威川において、フラッシュ放流実施の基礎データを得るため、ダム建設地下流において、糸状藻類の季節的な繁茂状況を調査し、降雨等との関連性を考察した。

P10 「谷まるごと里のいきもの自然保護区プロジェクト」

○中川亜希子・中川 功（一般社団法人 自然再生と自然保護区のための基金）

本プロジェクトは、奈良市大柳生地区にある 26 筆の放棄棚田からなる二次的自然を谷まるごと再生することを目的とするもの。2015 年に自然科学・民俗系の文献・現地調査、再生計画立案、基盤設計、2016 年末より草刈り・畦作り・湛水などの基盤整備を開始、2018 年 3 月時点で棚田 8 筆の整備や実験等を行なっている。今回は、整備より一夏経過後の 2017 年秋に環境要因および生物調査を行なったので、成果を報告する。

P11 「「田んぼの生きもの全種リスト」補完計画 始動編」

○大塚泰介（琵琶湖博物館）、北野大輔（滋賀県大院・環境科学）

私たちは琵琶湖博物館で「改訂版 田んぼの生きもの全種リスト」（桐谷編 2010）の増補更新とデータベースへの移植、および公開システムの構築を進めており、2020 年の公開を目指している。研究組織は水田の生物の様々な専門家（特に生態・分類）からなり、現在 38 名が参加している。データフィールドの統一、分類体系の規格化などの問題をクリアし、種数を 6,000 種近くまで増補した上で、現在、業者にデータベースへの移植を依頼している。

P12 「愛媛県岩松川周辺の水田環境に生息する生物」

深尾剛志（香川大学農学部）

愛媛県宇和島市を流れる岩松川に接する水田環境に生息する貝類、甲殻類、魚類、両生類および爬虫類について調査した。貝類 10 種、甲殻類 5 種、魚類 10 種、両生類 5 種、爬虫類 3 種の計 33 種を確認し、そのうち愛媛県レッドデータブック 2014 に 13 種、環境省レッドリストに 6 種が掲載されている。

P13 「水路の水生生物を増やす方法」

丸山月海・宮崎倫太郎・吉村元貴（太子町立中学校社会科学部）

本研究の目的は小規模三面水路の生物を増やすこと。そのため堰とセキショウを加え、変化をモニタリング調査した。まず、土砂がどの程度堆積するのか調査し、堆積した土砂の割合を調べ、次に水路生物種数調査を行った。堰やセキショウを加えることで水の流れが緩やかになり、土砂、生物ともに増えた。堰とセキショウがある地点に細かい土砂が堆積し、雨が降ると土砂の増減が激しくなり、水生生物を増やすには堰だけで十分である。

P14 「～太井川のホタルを増やす方法～」

京谷幸祐・平田いろり・狐坂音奏・吉村元貴（太子町立中学校社会科学部）

本研究はカワニナの生息適地を増やすことでホタルは増加するのかを調べることを目的に行った。2016年度の研究からカワニナの生息適地である日向の場所を増やすために草刈りを行った。次にケイソウ量を量る実験、カワニナの生息密度調査、ホタルの夜間調査などを行った。その結果、草刈りを行い日向の場所を増やすことでカワニナが増加すればほかの場所にカワニナが拡散していき太井川のホタルも増加すると考えられた。

P15 「石川におけるカワニナの生息条件と生息環境改善の取り組み」

○間嶋晃一・田中柊汰・奥石美優（大阪府立富田林高等学校科学部ホタル班）

これまでの研究から、富田林市内の石川のゲンジボタルはほぼ絶滅したことが明らかとなり、それは餌のカワニナ類の生息環境が失われたためと考えられた。そこで、2017年に石川河川敷の水路に生息するチリメンカワニナについて調査したところ、増水で生息数が1/3に減少したが、すぐに回復することがわかった。また、富田林土木事務所の協力を得て、増水から避難するための「玉石」を設置したが、ほとんど効果は認められなかった。

P16 「カワバタモロコを絶滅の危機から救え！カワバタモロコの卵を多く確保する方法は何か？」

鍵谷和輝・梅川翔平・溜島和花・吉村元貴（太子町立中学校社会科学部）

カワバタモロコの卵の採餌を減らし、より多くの卵を確保できるようにすることを目的として行った。その結果、採餌行動の対象を増やし、水深の中間あたりにツツジの葉を設置することが重要であることがわかり、また、産卵のピークは午前5時30分、採餌行動のピークは午前5時40分であることがわかった。つまり、その2つのピークの間にツツジの葉を親のいない水槽に移動すると、卵の確保が最大化することが分かった。

P17 「ダム湖のアユの由来についての考察 ～特異な環境に陸封されたアユの生態から～」

○長井勇樹・岩井広樹・岡本鼓都里（大阪府立富田林高等学校科学部魚類班）

2017年8月、石川上流域の滝畑ダム湖で、陸封されたアユを発見した。そこで、下流域の大阪湾から遡上する両側回遊型アユと比較しながら、11月まで生態調査を行った。その結果、陸封型アユは小型で、栄養状態は良好、産卵盛期が約1か月早く、付着性ケイ藻類を主食としながらも、ダム湖で動物を捕食したことなどが認められた。琵琶湖系アユに酷似しており、ダム竣工直後に放流された琵琶湖系アユに由来する可能性が高い。

P18 「京都府木津川ワンドにおける仔稚魚相」

○矢放七海（近大農）、高松真也（近大院農）、川瀬成吾（大阪経済法科大学）、細谷和海（近大農）

木津川ではワンドが多く形成されている。ワンドは魚類の繁殖生育場としての機能があると言われているが自然環境下で実証はされていない。そこで本研究では、2017年6月から8月にかけて木津川中流域に位置する環境条件の異なるワンド3地点を対象に仔稚魚相調査を行った。その結果、22種730個体の仔稚魚が採集され、外来種が少なく、仔稚魚相は比較的健全であり、絶滅危惧種を含む在来種のワンドでの再生産が確認できた。

P19 「近年の淀川城北ワンド群における外来種駆除と生息魚類について ―淀川水系イタセンパラ保全市民ネットワークの駆除活動成果より―」

○阿部最大（大阪市立都島工業高校）、上原一彦・内藤 馨（大阪府立水生生物センター）、鶴田哲也（大

阪産業大学), 舟越亮太・三好宏平・三橋雅子・綾 史郎 (大阪工業大学)

城北ワンド群ではイタセンバラが姿を消した 2006 年以降, 淀川河川事務所, 大阪府立水生生物センター, 市民団体による外来魚対策が本格化した。イタセンネットは 2012 年 4 月から 34, 35 号ワンドで駆除活動を始め, 2013 年 10 月にはイタセンバラが公開再導入された。本報文ではイタセンネットによる魚類捕獲結果より 2012 ~ 17 年までの駆除成果と魚類の変化, イタセンバラの導入後の生息状況を述べ, 外来種駆除・除去を続けていく必要性を述べた。

P20 「南河内におけるニホンイシガメの分布と実態調査」

○清水大河・岩根裕樹 (長野北高校科学同好会)

私達長野北高校科学同好会は 1 年半以上前から, 地元南河内, 特にそのなかでも 15 年以上南河内では調査が行われていない富田林市と河内長野市でのニホンイシガメの分布調査と個体数減少の原因の調査を行ってきました。

最初の 1 年間は富田林市を, 次の半年間は河内長野市のため池や川を調査し, ニホンイシガメの分布調査を行ってきました。調査方法は目視が主ですが, 水利組合の方等とも協力し, 自作した捕獲用のワナ等の設置も行いました。

その結果ようやくニホンイシガメを発見でき, なんとか発表できる情報量を調べる事ができたので, 春からの分布調査の前に少しでも皆様に大阪 (のカメ) の現状を知ってもらいたいと思い, 今回このポスター展に参加させていただきたく応募いたしました。

P21 「ヤマアカガエルとニホンアカガエルの行動比較」

○志知祐介 (大阪産業大学), 前迫ゆり (大阪産業大学大学院人間環境学研究科)

ニホンアカガエル (日本固有種, 絶滅危惧Ⅱ類: 大阪) とヤマアカガエル (絶滅危惧Ⅱ類: 大阪) は近年, 減少しており, 生活史に関する情報も少ない (Azuma & Takeuchi, 1998)。本研究では, 8 月 19 日と 10 月 9 日に大阪府むろいけ園地においてカエルの背中に反射板をつけて, GPS で 24 時間追跡調査を行ったので, 両種の行動の違いについて報告する。

24 時間継続的に観察した結果, ニホンアカガエルは 13 時および 22 時頃, ヤマアカガエルは 21 時頃に採餌を確認した。ニホンアカガエルは最大時速 4.7km/h (14 時頃), ヤマアカガエルは最大時速 8.3km/h (21 時頃) であった。

両種とも移動範囲は半径 15 m に限られていた。動物の行動解析においてはマイクロチップの埋め込みが有効であるが, 採餌行動などは直接観察による追跡調査が有効である。今回はサンプル数が各 1 と少ないため, 今後, 年間を通して追跡調査することによって, 採餌および繁殖行動を明らかにし, 両種の生息場所の保全につなげたい。

P22 「大阪府と近辺地域の外来種フロリダマミズヨコエビの採取・確認」

森本静子 (認定 NPO 法人シニア自然大学校研究部水生生物科)

外来種フロリダマミズヨコエビは, 日本では 1989 年に初めて記録された。水生の観葉植物などに付着して日本に持ち込まれたと考えられている。在来のヨコエビは原流域などに生息しているが, フロリダマミズヨコエビは, 河川の中・下流域のやや汚染のすすんだ水域にも生息し, 急速に分布を拡大している。私たちは大阪府と近辺地域の川の生き物調査を行い, 18 箇所 で採取・確認した。今回, 文献記録を加えて合計 19 箇所の生息地を報告する。

P23 「和歌山県におけるクロガジグモの分布」

関根幹夫

クロガジグモ *Badumna insignis* (L. Koch 1872) (クモ目ウシオグモ科) は、オーストラリアからの帰化種で、1963 年に大阪府で最初に確認され、1975 年には和歌山県・すさみ町において全国で 2 番目となる生息確認がされた。2017 年 6 月の調査により、和歌山県の全市町村での生息が確認され、本種は和歌山県の広域に定着していることが明らかとなった。北山村では局所的に生息することから、比較的最近に北山村へ移入したと考えられる。

P24 「大阪府に侵入したアルゼンチンアリが在来アリにおよぼす影響」

渡邊琢斗・平井規央・上田昇平（大阪府大院・生命）

アルゼンチンアリ（以下、本種）は南米原産の侵略的外来アリであり、侵入地では生態系を攪乱し、生物多様性を低下させることが知られている。本研究では、大阪府内で本種の定着が確認された 2 地域と未侵入地 1 地域においてアリ類の種組成を粘着トラップを用いて調査し、本種が在来アリの種多様性に及ぼす影響を評価した。その結果、侵入地では本種の個体数密度が高い地点ほど、アリ類の種多様性が低下することが明らかになった。

P25 「海浜性コウスバカゲロウ属 2 種の遺伝的多様性」

中山 桂・上田昇平・平井規央（大阪府大院・生命）

海浜性のハマベウスバカゲロウ *Myrmeleon solers* は、近年の護岸工事や砂地の改変によって生息地の縮小が懸念されており、3 県でレッドリスト掲載種となっている。本研究では、新潟県から福岡県にかけての日本海側 9 地点で採集した本種と、同じ場所で採集した近縁のクロコウスバカゲロウ *M. bore* の 2 種を用いて mtDNA を用いた分子系統解析を行った。その結果、両種とも集団間の分化の程度は小さく、遺伝的多様性はハマベウスバカゲロウが低い傾向が認められた。

P26 「泉佐野市の緑地におけるヒメボタルの季節消長と生息場所選好性」

喜多亮介・上田昇平・平井規央（大阪府大院・生命）

ヒメボタルの生息と植生の関係を明らかにするため、大阪府泉佐野市の公園で成虫の季節消長と幼虫の分布についての調査を実施した。成虫の発生時期は草原を含む環境が他の植生に比べて早く、幼虫の分布は餌である陸生貝類が多く分布するクスノキの周辺で多い傾向が示唆された。本種の保全にはこうした多様な植生の存在を維持することが重要と考えられる。

P27 「神戸市丹生山系湿地群に生息するイトウホソバトビケラの生活史」

渡辺昌造（ひとはく地域研究員）

水生昆虫のトビケラ目の一種イトウホソバトビケラは北海道から近畿まで分布しているが、採集地は局所的である。生息環境は山地湧水や湿地で、1 か所で採集される個体数は少なく、生活史は詳しくわかっていない。分布の西端にあたる神戸市北区の丹生山系の湿地群に本種が生息することが確認されたため、2 年間の通年採集を行った。本報告では採集調査の結果と考察をまとめる。

P28 「生駒山系におけるオオムラサキとゴマダラチョウの生息環境」

坂本陸王（大阪産業大学），○前迫ゆり（大阪産業大学大学院人間環境学研究科）

オオムラサキ（準絶滅危惧種）とゴマダラチョウ（普通種）は形態が類似しており，幼虫期の食草は両種ともエノキである。しかしオオムラサキはゴマダラチョウに比べて，個体数は著しく減少している。越冬幼虫期における死亡要因は落ち葉の乾燥とされているが（Kobayasi & Inaizumi, 2003），生息環境に関する情報はきわめて少ない。本研究は温度および湿度条件に着目し，データロガーを設置して，2種の生息環境について検討したので報告する。

両種の個体数分布に基づいて，オオムラサキの幼虫が多い立地から少ない立地まで，5本のエノキを選定し，2017年2月から2018年2月までの期間に5カ所で温度および湿度の連続データを計測した。その結果，オオムラサキが多く生息している地点では，幼虫期の平均温度が $1.5 \pm 3.2^{\circ}\text{C}$ （年平均気温 $16.5 \pm 7.2^{\circ}\text{C}$ ），平均湿度が $79.6 \pm 12.2\%$ （年平均湿度 $87.5 \pm 13.8\%$ ）に対し，オオムラサキが生息していない（ゴマダラチョウは生息）地点では，幼虫期の平均温度が $4.4 \pm 3.9^{\circ}\text{C}$ （年平均気温 $20.2 \pm 7.7^{\circ}\text{C}$ ），平均湿度 $69.5 \pm 14.6\%$ （年平均湿度 $68.9 \pm 17.6\%$ ）であり，両種の温度条件と湿度条件にはそれぞれ有意な差が認められた（ $p < 0.01$ ）。

湿度環境については先行研究の乾燥と幼虫期の死亡の関係を支持するものであった。温度環境が高いことが幼虫の制限要因となるか否かについては，詳細に検討する必要があると考えている。

P29 「大阪府立大学中百舌鳥キャンパスのチョウ類多様性」

山内悠司（里環境の会 OPU）

大阪府立大学中百舌鳥キャンパスには農場等の緑地が存在し，都市域の生物の貴重な生息場所である可能性がある。そこでルートセンサス法でチョウ類の調査を行い，キャンパスの環境の評価を試みた。結果，2017年度はルート外の記録も含めて26種を確認し，EI値は農村・人里程度の値を示した。また，多様度指数を区間で比べると比較的值の大きな区間がいくつか示され，それらがチョウ類の多様性の維持等に重要である可能性が考えられた。

P30 「大阪経済法科大学花岡キャンパス周辺における鳥類相」

○横川正哉（大阪経済法科大学 ECO ～る∞ KEIHO），川瀬成吾（大阪経済法科大学）

八尾市高安地域に位置する大阪経済法科大学花岡キャンパス周辺にて，確認された鳥類を随時記録する調査と，月に1回のルートセンサス調査を実施した。その結果，59種の野鳥が記録された。チョウゲンボウやハヤブサといった猛禽類をはじめ，大阪府絶滅危惧Ⅱ類のヒクイナや，準絶滅危惧種のノスリやトラツグミが確認された。その一方，外来種のソウシチョウやコジュケイも生息しており，在来種への影響が懸念される。

P31 「大阪市内の公園で繁殖する鳥類：最近20年の変化」

大阪鳥類研究グループ，○和田 岳（大阪市立自然史博物館）

1997年から2017年まで，大阪市内の2ha以上の公園43ヶ所において，繁殖期に生息している鳥類の調査を，5年ごとに実施している。この20年の間に，ハシブトガラスやシジュウカラが確認される公園が増えたのに対して，モズやセグロセキレイは記録されなくなった。2012年からチョウゲンボウが，2017年の調査では初めてイソヒヨドリが記録され，今後増加するかどうか注目される。

P32 「和歌山県友ヶ島の移入ジカワーキンググループの発足を目指して」

松本悠貴（総合研究大学院大学）、東城義則（国立民族学博物館）、幸田良介（大阪府立環境農林水産総合研究所）

和歌山県の友ヶ島には、1955年にニホンジカの台湾亜種のタイワンジカが移入された。昨年、友ヶ島に近い本州の大阪府南部でシカが捕獲され、遺伝解析により、その個体が友ヶ島のシカと在来ニホンジカの交雑個体であることが分かった。現在、主に紀伊半島西部で遺伝的モニタリングを行っているが、今後、より広く活動を行うためにワーキンググループの発足を目指している。本発表ではこの現状と今後の展望について紹介する。

P33 「地域に眠る学校等博物標本が語るもの ～能勢町博物標本整備事業を通じて～」

○道盛正樹（認定特定非営利活動法人大阪自然史センター）、市川顕彦・河合正人（大阪市立自然史博物館友の会）、佐久間大輔（大阪市立自然史博物館）、天満和久（認定特定非営利活動法人大阪自然史センター）

かつて、学校などの理科室や資料室には、実物を教材として観察させるための標本が保有され、研究や教育の歴史において標本が重要な役割を果たしてきた。近年、映像資料などの充実や学校の統廃合までもが標本の存在を忘れさせかねない現状にある。博物標本は地域のみならず人類共有の財産であり、また地域の自然史を探る上でも重要な手がかりとなる。今回、歴史と伝統のある能勢町でそうした機会を得たので、その事例を紹介する。

P34 「大阪府最北端の地・能勢町歌垣地域のクリ林などの多様な生物相の解明に向けて」

○天満和久（認定特定非営利活動法人大阪自然史センター）、市川顕彦・河合正人（大阪市立自然史博物館友の会）、佐久間大輔（大阪市立自然史博物館）、道盛正樹（認定特定非営利活動法人大阪自然史センター）

歌垣山山麓に広がる歌垣地域は丹波栗系の「銀寄」発祥の地とされ、里山景観にも優れている。クリの受粉は周辺の在来昆虫との関わりが深く、地域景観を構成する重要なユニットでもあるクリ林が地域の生物多様性に果たす役割は大きいと考えられる。そこで、地域資源を活用したエコツーリズムを開催しながら、周辺地域の生物調査の実施やGBIFなどの生物多様性情報も活用し、生物多様性による地域おこしの可能性なども検討する。